

## 【岩松助左衛門と白洲灯台】

岩松助左衛門は1804（文化元）年豊前国企救郡長浜浦（現在の北九州市小倉北区長浜町）で生まれました。

18歳で長浜浦の庄屋となり、以来40年間庄屋を務め、その後その功績と経験が認められ「小倉領海上御用掛難破船支配役」という役職を命ぜられました。

小倉沖の響灘は筑前・肥前方面から瀬戸内海へ往来する航路、また日本海からやってくる北前船が通航する海の幹線で、幕末・維新の頃には1年間に2万隻もの船が航行していました。しかしこの辺りは、暗礁が多く急潮のため、船乗りからは海の難所と恐れられていました。

その中でも特に、藍島の南西1kmのところにある白洲と呼ばれる大暗礁（長さ140m・横100m）での海難事故は後を絶ちませんでした。

庄屋の頃から難破船の救助を数多く経験してきた助左衛門は、この暗礁の危険から航海者を守るためにこの白洲に常用灯の灯籠台を建てることを発案し、1862（文久2）年4月、小倉藩に白洲灯籠台築立願を提出しました。

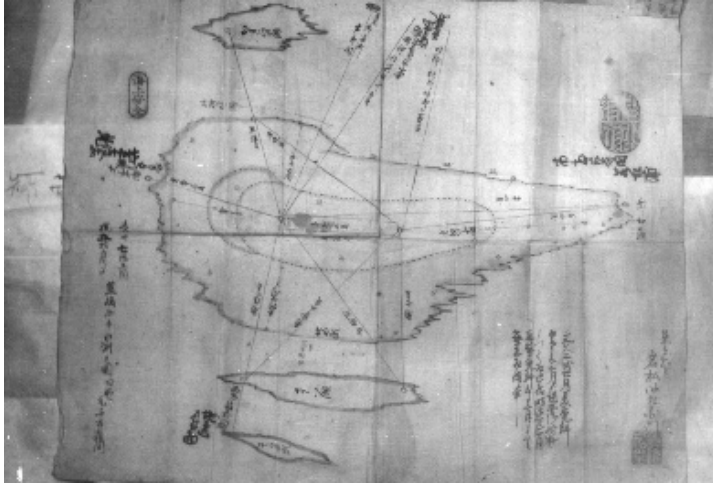
時は幕末から明治へ変わろうとする大混乱の世情の中、助左衛門は岩松家の全財産を投じ、不足の建設資金は募金・借金と奔走しました。近隣漁民の反対、事業を支えてきた妻とみの死など幾多の困難を乗り越え、ついに1870（明治3）年7月、基礎築立の竣工を見ることができました。

1871（明治4）年4月、明治政府は海の交通整備を図るために危険な航路に灯台建設を進めるための灯台寮を設置。助左衛門の進めてきた工事は政府に引き継がれることになりました。

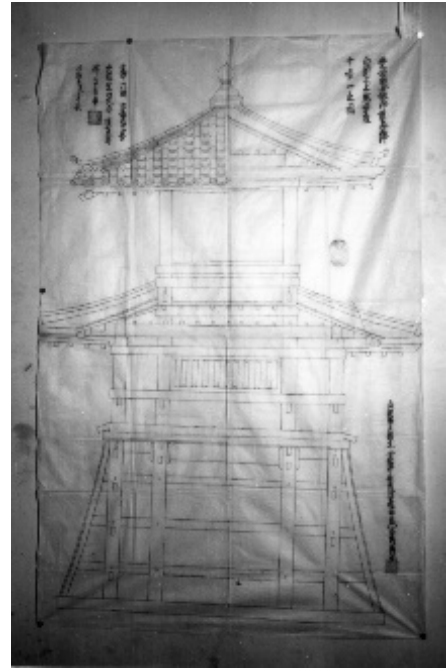
1872（明治5）年3月、白洲での建設工事が始まりました。しかし、人命尊重の悲願のために一念を燃やし続けた岩松助左衛門は同年4月25日、白洲灯台点灯を見ることなく死去しました。

助左衛門が作った旧施設は、政府が買い上げ1873（明治6）年9月6日、ようやく白洲灯台は完成。正式の灯台として発足しました。  
（岩松助左衛門翁顕彰会資料提供）

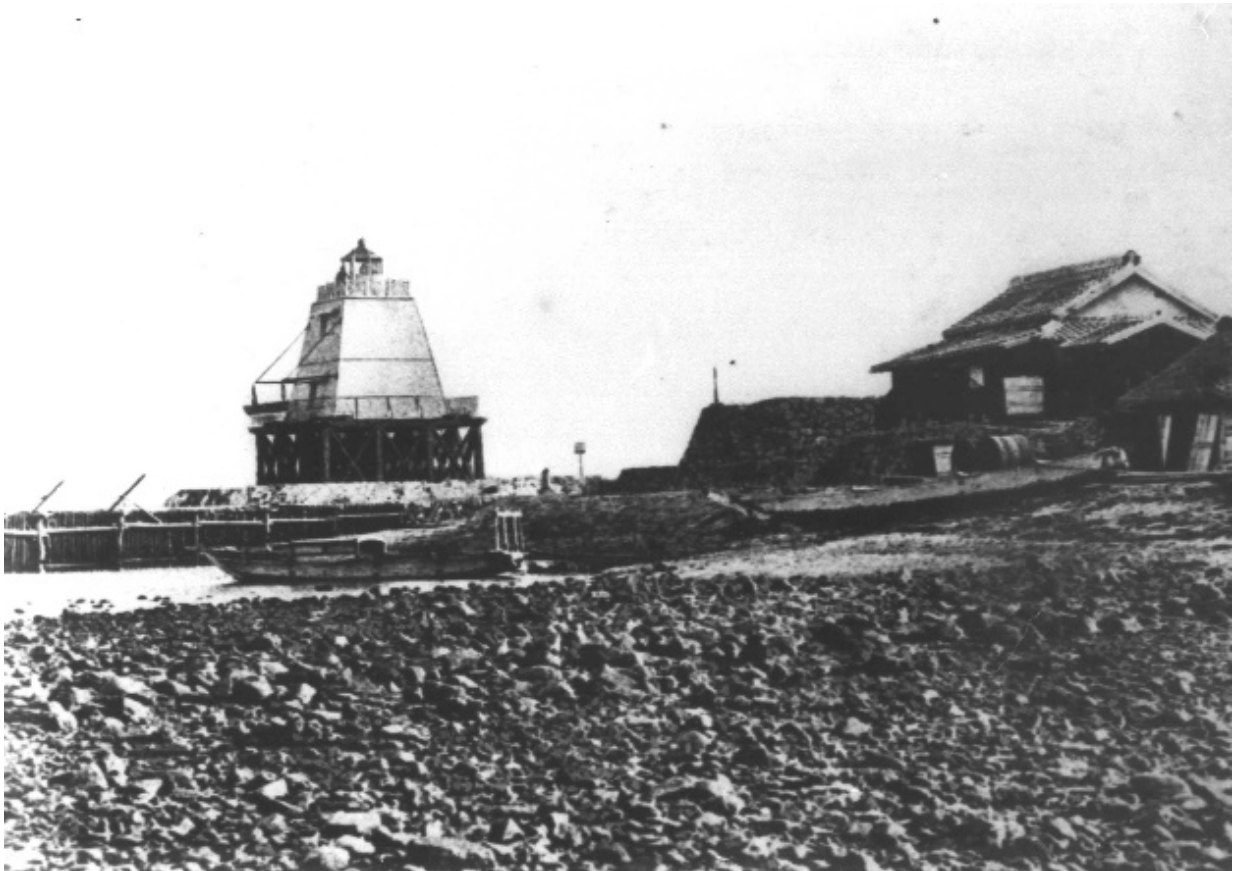




白洲暗礁調査海図



助左衛門翁の設計図



完成当時の白洲灯台(明治6年)





白洲全景



遭難者を慰霊するために  
白洲に設置されている鎮魂碑



白洲灯台顕彰櫓(小倉城内)  
(岩松助左衛門翁顕彰会提供写真)



顕彰櫓横の記念碑(小倉城内)



長浜及び白洲位置図

長浜